

情報の消費と浪費

「情報体」概念に基づくコミュニケーションの形

曾我千亜紀

1. はじめに

1-1. 問題の背景

現在の高度な情報化/消費化社会には様々な問題が存在する。例えば、環境、資源、エネルギー、貧困等々の問題が挙げられるだろう。現代社会のシステムを積極的に推進する人々はこれらの問題やデメリットを過小評価しようとする。とはいえ、現代社会が持つ自由や多様性といったメリットは何物にも代えがたい。問題点を指摘する人々は逆に、このような現代社会のメリットを充分に見ようとしない⁽¹⁾。限りある物的資源を前に、大量生産→大量消費→大量廃棄のサイクルを脱することは可能であろうか。ただし、今ある社会の〈自由〉や〈多様性〉を手放すことなく、という条件付きで。

このような問いを投げかけた見田宗介は、その解決のために一つの可能性を提示している。それは情報概念の再問題化である。見田は情報の無際限性を強調することによって限界問題を突破しようとしている。なぜなら、情報は物的資源とは異なり、限りなき資源となりうるように思われるからである。

1-2. 問題提起

ところで、情報の無際限性を主張するとき、それを制御すべきか否かという問題が生じてくる。例えばバタイユは、「奢侈」にこそ人間を見て、禁忌に縛られることのないエネルギーの解放を目指す。この立場を敷衍するならば、情報に関しても際限なく消費する姿勢 --- 情報の消費がさらなる消費を呼び、記号がさらなる記号を呼ぶような姿勢 --- が称賛されることになるだろう。それに対して、たとえ情報が無際限に湧出する資源と見なされるとしても、ある程度のコントロールを引

き入れるべきだという考え方がありうる。歯止めのきかない消費は、資源の限界問題を解決するどころか、問題を加速させると見なされるからだ。ただし、もし情報の消費を制御するのであれば、それがどのような仕方でもなされるべきか、どのようなあり方をするのかを問わねばならない。

本論ではまず、情報の無際限な消費について考察するために、國分功一郎の言う浪費と消費の概念の区別を検討し、それを情報論の視点から問い直す。その上で、情報や記号の消費を制御しようとする際に、いかに無造作に身体あるいは身体性が導入されているかを指摘する。最後に、身体および精神が情報コミュニケーションにおいてどのような形で関わるべきかを論ずることとする。

2. 浪費と消費

2-1. 國分功一郎によるボードリヤール解釈

國分功一郎『暇と退屈の倫理学』の第四章は、鋭いボードリヤール解釈となっている。彼はボードリヤールを引用しつつ、浪費（consumation）と消費（consommation）を区別し定義する⁽²⁾。

國分はまず、否定的に語られることの多い贅沢を推奨することから始める。必要なものを消費するのではなく、必要を超えて物を受け取ったり吸収したりすることが贅沢であり、浪費であるという。一見、無駄に思われる浪費であるが、しかし、浪費はある一定の時点で必ず止まると國分は言う。引用しよう。

浪費は満足をもたらす。理由は簡単だ。物を受け取ること、吸収することには限界があるからである。身体的な限界を超えて食物を食べることはできないし、一度にたくさんの服を着ることもできない。つまり、浪費はどこかで限界に達する。そしてストップする⁽³⁾。

それに対して、消費は留まるところを知らないとされる。無駄に思われる浪費が限界を超えることがない一方で、消費は無際限である。

消費は止まらない。消費には限界がない。消費はけっして満足をもたらさない。

なぜか？

消費の対象が物ではないからである。

人は消費するとき、物を受け取ったり、物を吸収したりするのではない。人は物に付与された観念や意味を消費するのである。ボードリヤールは、消費とは「観念論的な行為」であると言っている。消費されるためには、物は記号にならなければならない。記号にならなければ、物は消費されることができない⁽⁴⁾。

浪費には限界があるが消費には際限がない。これはまさに見田が、物的資源の限界と情報の無際限性を対比させる図式と一致する。國分は「身体」の満足による浪費を推奨するという倫理の形を提示する（それはおそらく結果的に、物的資源の消費に歯止めをかけることになるだろう）のに対し、見田は唯一の無際限な資源である情報を活かす倫理を探求しようとするのである。

確かに身体的満足は、現代の人々が見失っているように思われる物のレベルでの充足をもたらしうるし、そのおかげで記号や観念にとらわれずに物と相対することができるようになるだろう。事物への回帰は、倫理における一つの可能性であるように思われる。

2-2. 中沢新一のモース批判

消費に身体性を導入して「物」を取り戻そうとする國分の方向性と、レヴィ=ストロースを介してモースを批判的に継承する中沢新一の方向性には類似がある。中沢もまた、「モノ」の重要性を主張しているからだ。

社会科学がおかれる状況の特殊性は、社会科学の対象が対象であるとともに主体でもある ---- デュルケームとモース ---- の言葉でいえば、《物 chose》であるとともに《表象 représentation》である ---- という、その対象の内在的な性格に基づくいま一つ特異な性質をもっている⁽⁶⁾。

そのうえで、『贈与論』におけるハウの概念⁽⁶⁾が独り歩きしてしまうことを、レヴィ=ストロースは懸念する。なぜならそこには物という視点が欠けており、ハウの

みに ---- すなわち表象のみに ---- 囚われてしまう危険性があるからだ。中沢もレヴィ=ストロースと同様、モースの功績をたたえつつも、次のように批判する。

モースは贈与に対する返礼（反対給付）が義務とされることによって、贈与の環（サイクル）が実現されると考えたのだが、そのおかげで、贈与と交換の原理上の区別がなくなってしまったからである⁽⁷⁾。

社会学的思考に欠けているものがあるとすると、それはモノ（Ding）である。モノは贈与や交換や権力や知の円滑な流れをつくりだすすべての「環（サイクル）」に、いわば垂直方向から侵入して、サイクルを断ち切ったり、逸脱させたり、途方にくれさせたりすることで、「環」の外に別の実在が動いていることを、人々に実感させる力をもっているのである⁽⁸⁾。

ここで中沢は、純粹贈与と贈与、そして交換を三つの要素とする原理を考えることによってモース（そしてレヴィ=ストロース）の考えを独自に展開していく。ただ表象だけが行き交う世界に、物や自然 ---- 純粹贈与はまさに自然によってもたらされる ---- が介入することが必要である。人々はそのような介入には、意識的にか無意識的にか、気づかないふりをする。しかしながら、コミュニケーションにおいて物や自然を見ずにすまずことはできないであろう。

2-3. バタイユによるポトラッチ解釈

贈与における以上の側面を見る限り、身体性の（すなわち事物の）概念を導入することによって新しい倫理を論ずる可能性はある程度の説得力を持つように思われる。その一方で、見田宗介が主張するように、贈与が極限まで押し進められるポトラッチの例から、情報資源の無際限性を積極的に活かす方向を模索することもできる。ポトラッチでは、決して返すことのできない量の贈り物をしたり、挙句には贈り物を見せたくえで破壊したりすることさえ行われる。

バタイユは、モースを踏まえつつポトラッチを次のように理解する。一見、無意味で無駄に思われる度を越した贈与と破壊が行われている。破壊は何ももたらさないかのように見え、そのような行為を理性的に理解することは不可能であるように

思われる。しかしながら実のところ彼らは破壊と引き換えに「身分」を得ているのである。

この制度（ポトラッチ）の重大な意味は、損失によって ---- そこから身分、名誉、階級制内での地位がもたらされ ---- 実質的所有が成り立つ点である。贈物は損失と、つまり部分的破壊と考えねばならない。破壊したい望みを一部分受贈者に振り向けるわけだ⁽⁹⁾。

「理想的なかたちは」とモースは指摘している。「ポトラッチを与えて、返報を受けないことであろう」。この理想は慣習の中に可能な対応物を見出せぬような或る種の破壊行為を行なうことによって実現される⁽¹⁰⁾。

たしかに、破壊を身分や地位との引き換え行為と見なすのであれば、返報を受けないことが身分の確立をもたらすことになる。しかしながら、返すことのできない贈与はコミュニケーションを養うことができない。

中沢新一は返礼しえない贈与に対して懐疑的であった。彼は志賀直哉の小説『小僧の神様』を例に挙げ、純粋な贈与を行うことの難しさと、純粋贈与が関わることによって引き起こされる贈与者自身の負い目（神と同一視される）を指摘する。それに対し、自然は純粋な贈与をなしうる。ここから中沢は独自の純粋贈与論へと進むが、ここでは論じない。

一方、行き過ぎた贈与であるポトラッチについて、それを純粋な贈与と同一視するのではなく、そこから無駄なものの消費や濫費の意義を問うことはできよう。そのような消費や濫費は、人間だからこそなしうるものである。バタイユの言うように、必要性のみに囚われず、「奢侈」に流れることが、逆説的ではあるが最も人間的である。この点において、バタイユに従えば「文化」は「奢侈」であると言えよう。

ポトラッチの例が私たちに教えるのは、少なくとも、物と物との交換や、物と貨幣との交換とは別の次元でのやり取りが行われる可能性である。例えば、「評価」や「名誉」を付与する/付与される可能性である。以下、この側面を強調することによって、サイバースペースにおけるコミュニケーションを別の形で捉えることを試みたい。ただしそれは、「評価」や「名誉」そのものを交換の始まりから目指す

コミュニケーションではない。いわば、結果的に与えられる「評価」「身分」「名誉」に限定されない「意義深さ」「歓び」といったものを視野に入れたコミュニケーションである。

3. 情報体概念の導入

3-1. 消費と浪費のあいだ

物ではなく記号を消費することは、この歯止めのきかないエネルギーによって人々が動かされることを意味する。記号の消費は決して満足に行き着くことはなく、差異を求めてとどまるところを知らない。國分功一郎はこれに対して、消費ではなく浪費を、すなわち身体による満足を取り戻すことが重要であると主張したのであった。

たしかに、身体レベルでの満足を強調することには意味がある。私たちは記号や情報のみによって生きることはできないからだ。しかし身体による満足を単に必要性の次元への回帰を意味するのであれば、人間的な部分、文化的な要素を排してしまうことになる。この矛盾を脱することは実は容易ではない。消費と浪費、奢侈と必要性の狭間を見出さなくてはならないからだ。

消費やエネルギーは極限まで押し進めて良い。しかしながらその方向性を制御すべきである。これが人間として矛盾を突破するための途である。ここでは消費と浪費の間を探るために、「情報体」の議論を導入することにしたい。

3-2. 「情報体」とは何か

「情報体」とは何か。端的に言うならば、それは精神と身体が区別されつつも合一しているという状態を指す。情報体は一つの実体であると同時に機能でもある。

この概念はデカルト的二元論を積極的に発展させることによって得られた⁽¹⁾。デカルトは精神と身体を厳密に区別するが、その後、心身の合一について語る。このようなデカルト的二元論を単なる二項対立ではなく、二項の区別と合一との両立を目指す理論として捉え直すのである。そのような（一見矛盾するように思われる）二項の区別と合一とが両立している状態をここでは情報体と呼ぶ。例えば、精神と身体の違いと両立、情報の物理的側面と意味的側面の区別と両立といったもの

がそれに相当する。それだけではなく、精神と身体の合一したもの ---- 仮に主体と呼ぼう ---- と情報との区別と合一、集合体や共同体における個と全体の区別と合一といったものへとこの概念を広げることができる。

さて、情報は商品に付加価値を与えることができ、人々はそれに対して対価を支払うことを厭わない。商品は情報体として事物的側面と意味的側面を担いつつ流通する。すでに見たように私たちは、事物に対するそのような接し方が近代性に由来するものではないことを知っている。情報の与える付加価値はマオリ族における「ハウ」に相当し、現代社会は「ハウ」に満ち満ちているとも言えるのである。

逆に言えば、人々と関わることのない打ち捨てられた事物にハウは宿らない。もし、何らかの石に対して注意を払う人間が誰一人いなければ、その石は情報体ではない。しかし、その石に対して何らかの付加価値を見出したり（例えば、思い出の地と結びつける）、その存在の特殊性を認めたりする（例えば宗教的意義を見出す）のであれば、そのとき石は情報体へと変容する。事態はテキストや芸術作品であっても同様である。誰にも読まれないテキスト、誰からも忘れ去られた芸術作品は、それ自体価値を内包し情報体として存在しているわけではない。その物理的側面と意味的側面の二項を合わせて捉えることによって生ずるのが情報体というあり方なのだ。

本論で主張したいのは、浪費でも消費でもない新たな「費やし方」を考えなければならぬということである。浪費は、身体に依拠して制限をかけようとする。消費は、精神（記号や意味）に基づいて留まるところを知らない。目指すべきは、消費のエネルギーの方向性を制御して（その制御は身体に拠るところが大きい。なぜなら、やはり私たちは「事物」にも対峙しているのだから）、それでいて、事物から最終的に離れた（あるいは離れているように見える）力の発揮である。事物と精神の区別と両立が見事に実現されたとき、そのような「費やし」は情報体となり、情報コミュニケーションの新たな次元を拓くのである。

バタイユの言うように、単なる禁忌を犯す、タブーを破るということ自体が目的化されてしまえば、それは単なる既存の社会システムや体制に対する反発でしかない。それでは、既存のシステムを超え出することは決してできない。なぜなら、このような行為は「反する」という点に重きを置いており、既存のシステム自体が破壊されたり、意味をなさなくなってしまうりしたら、「反する」こともまた不可能になってしまうからだ。

一方で、「身分」を得るという考え方は、サイバースペース上で「評価」を得るという考え方へとつながりうる。リナックスの創始者やフォーラムで質問者に対して丁寧な回答を返す人々、ウィキペディアの執筆や編集に携わる人々などは、金銭的な見返り（つまり、貨幣経済の枠組みで理解されるような報酬）を求めているわけではない。彼らが喜びとするのはむしろ評価であり、自らが発信した情報を多くの人々が認めることそれ自体である。さらに言えば、そもそも報酬や見返りなどを求めておらず、評価ですら事後的であって、ただ単に彼ら自身の楽しみのためになされることすらあろう。その「歓び」はポトラッチの例が私たちに教えたものである。

ただし、次の点に留意すべきである。ポトラッチの破壊が結果的にある種の「身分」をもたらすとしても、だからといって必ずしも、彼らが最初から「身分」を求めて、見返りだけを目的として、破壊を行っていることを意味しないという点である。一般に、何ら見返りも期待できないような状態で贈与をする、贈り物をするという行為は理解しがたく思われている。しかしながら、彼らが破壊に赴いたのは、その後続く評価のみに動かされているわけではなく、彼らがすでに多くのものを受け取っているからである。ただし、この出発点は隠されて私たちの目には映らない。ポトラッチや贈与の本質は返礼にあるが、返礼がなされて初めて、贈与されていたことが明らかとなる場合もあるだろう。いや、むしろこのような事後性が贈与の本質を表している。返礼の義務、すなわち「反対給付義務」は、贈り物をする者自身にも隠されており、贈与することによってそれが（すでに受け取っていたものに対する）返礼であったと気づかれる。贈与-返礼の関係は予め存在しているわけではなく、結果として現れるのである。

3-3. 贈与のコミュニケーション

中沢新一が、人間にとって純粋贈与は不可能である、あるいは非常に困難な行為であるというとき、彼が念頭に置くことを忘れてしまっているのは（あるいは彼の議論から表立って見えてこないのは）、私たちがすでに何かに負っているという事実である。そして、贈与と返礼を、直接的に二者間で行われるやり取りにとらわれて（いるかのように）考察してしまっているところが問題である。贈与はもっと開かれた不特定多数のネットワークの中で論じられるべきである。

情報コミュニケーションもまた同様である。何も受け取ることなくすべてに先立

って情報を発信できる人は誰もいない。私たちがやり取りしている情報はすでに網の目の中を伝わってきたものであり、パスされたボールである。最初にボールを置いた者のみが純粋な贈与を為したと言いうるが、それは自然や神の仕業であって、私たちはすでに予め情報ネットワークやボールゲームの中に投げ込まれている。

情報を循環させたりボールというパスを出し続けたりすることは、気づかぬうちに私たちがコミュニティに参加して贈り物をするのである。結果的に与えられる評価を目指すことはもちろん可能である。それは一見、等価交換のコミュニケーションにも思われる。ただし、従来の貨幣経済とは別の次元の枠組みへとシフトする興味深い潜在的力を秘めている。いわば金銭で計量できるような等価交換とは異なる交換の始まりである。しかし、この段階への到達を完了と考えてしまえば、従来の「金銭」が果たしていたのと同じ役割を、この段階では「評価」という金銭ではないものが代替して果たすだけに終わってしまう怖れがある。「評価」が貨幣的に機能してしまうと、結局のところ共通の指数としての数値に還元され、評価の質や深みが消え去り、「できる限り大勢の人々に評価されること」を最大の価値としてしまいかねない。価値評価というものはそれほど単純なものではない。私たちは共通の一つの基準というよりも、多様で多彩な価値評価を並立させるようなシステムを考案する必要がある。

デリダは返礼を期待する贈与は純粋な贈与とはいえないと主張した。負債や義務を人に負わせるものは贈与の名に値しないというわけである⁽¹²⁾。デリダにとっては、そもそも贈与とは気づかれない、あるいは贈り物を受け取っているとは気づかれないような無意識のやり取りこそが本来の姿なのである。

しかしながら、何かを受け取っていることを負債と捉えるかどうかは問われてもよいだろう。贈り物の受け取り方にも作法があり、きちんと受け取るということは生産的なコミュニケーションへと繋がりうる。例えば、贈り物としての情報を見事に受け取った場合、それは創造的行為となるだろう。情報体に接して情報を受け取ることは、その情報体の解釈ないし意味付与を遂行することである。それが従来に見事なものであれば、創造的行為であると言いうるだろう。こうして、意味の「付与」は「贈与」となりうるのである。いわば、受け取りが次の贈り物へと変様するのである。創造的な情報の受信は情報の発信となる。優れたテキスト解釈が次世代へと受け継がれるということがありうる。テキストの解釈者はその創造的解釈によってある種の返礼をしているわけだが、その行為は負債や義務というマイナス

の側面のみによって動かされているわけではない。

3-4. 欲求と欲望

再び國分功一郎の議論へと戻る。彼自身、消費と浪費の区別はさらに洗練されるべきであると考えているようだが⁽¹³⁾、ただ単に身体の導入を素朴に行ったところで、両者の区別はそれほど容易ではないだろう。

問題は身体もまた精神に多大なる影響を受け、いわゆる本来の（自然の）限界を大きく踏み越えることである。例えば、過食である。そもそも、自分の欲求が精神に由来するものなのか身体に由来するものなのか見極めることはかなり困難な行為である。今、ある本を読みたいと思っている自分。それは記号に駆動されているのか、本来的欲望なのか。ある音楽を聞きたいと思っている自分。この欲望はどこからきたのか。

おそらく、バタイユの考える文化とは、文化のある一面を表してはいるが、それがすべてではない。文化的なものへの憧憬や文化への欲望は、単なる身体的なものでも、単なる精神的なものでもおそらくない。むしろ情報体という概念に結晶されるような、身体と精神が区別されつつも合一し、区別と合一の両立が見事に成立するときに、ひとは初めて文化や文化的事象に対峙することができる。プラトンはアリストファネスを批判して、エロースを次のように定義する。本来あるべきものがないという欠如、喪失感からではなく、善きものが欠けているからこそ求めるという心の動きがエロースである⁽¹⁴⁾。これを踏まえたとえで、レヴィナスは渴望(désir)について語る。他者を求めるのは必要性に基づく欲求(besoin)ではなく désir である。決して満たされることはないが、だからこそ掻き立てられる渴望なのである⁽¹⁵⁾。

他者とは、私とは異なる者である。私の持たない何かを持ち、私の知らない何かを知る者である。それを求める心が渴望でありエロースである。それは単に誰かを求める心の動きだけを意味するわけではない。これらは私たちが何かを学んだり、コミュニケーションしたりするときにも当てはまる。文学や美術作品や情報を求めたり解釈したり表現したりするとき、ひとは必要性からだけでなく、喪失感あるいは体制や禁忌への反抗からだけでもなく、善きものを求めるという渴望によって動かされるのである。情報の解釈という意味の「付与」が「贈与」となりうるなら

ば、それは善きものを求めるという渴望によって生じた贈与である。すなわち、ある情報体が新たな善や美であるとする意味付与は、贈り物であり、創造的な受け取りという形の返礼なのである。

4. おわりに

以上のように、情報の〈費やし方〉に関して、身体主導の浪費でも精神主導の消費でもないあり方を考察した。身体と精神の区別と合一を両立させるという困難ではあるが、しかし決して不可能ではないコミュニケーションが、現代社会のシステムが直面している諸問題を解決する端緒となる。今後はこのような情報の〈費やし方〉と贈与の関係についてさらに明らかにしたうえで、贈与のコミュニケーションを正当に評価しうるシステムを提起しなければならないだろう。今後の課題としたい。

註

- (1) 見田宗介は『現代社会の理論』において広い射程に立って現代社会が未来に向けて内包している問題を提起している。有限である資源と私たちが享受している自由と多様性の対立という問題提起は社会問題を考えるにあたって避けては通れない。これに関して加藤典洋は、『人類が永遠に続くのではないとしたら』においてエコロジスト（資源保護を主張）とポストモダニスト（多様性の価値を主張）という二つの立場が互いを全く見ることなくそれぞれの議論を展開していると指摘している
- (2) ボードリヤール自身は、浪費を *gaspillage*、消費を *consommation* と表現している。一方、見田宗介は、ボードリヤールの表現とバタイユを参考にしつつ、消費の二つの形態を区別し、消尽としての〈消費〉と商品の「消費」と表現している。これらを勘案したうえで、國分の言う浪費を必要性のみに囚われず使い果たすという意味で *consumation* と、消費を *consommation* と訳すことにしたい。
- (3) 國分功一郎『暇と退屈の倫理学』朝日出版社、pp. 144-145.
- (4) 同上、pp. 145-146.
- (5) Mauss, *Sociologie et anthropologie*, P.U.F., p. 24. (モース『社会学と人類学 I』弘文堂、p. 19.)
- (6) モースが『贈与論』において言及しているマオリ族の例は、贈与のシステムを考えるために、しかも情報論と関連させて論ずるために非常に有効である。彼らは靈的な概念「ハウ」を持っている。この靈的概念は贈与された物品に宿るものとして考えられている。この「ハウ」を祓うためには返礼をしなければならない。返礼しなければならない

いと感じるこの「負目」がいわゆる反対給付義務 (contre-prestation) である。このような義務を果たすために返礼は贈与されてきた道筋を逆に辿り、最終的に贈与と返礼の円環は閉じられる。

(7) 中沢新一『愛と経済のロゴス』講談社、p. 5.

(8) 同上、p. 6.

(9) Bataille, *La part maudite*, Éditions de minuit, p. 34. (バタイユ『呪われた部分』二見書房、p. 275.)

(10) *Ibid.*, p. 276. (同上、p. 34.)

(11) 本論では詳しく展開しなかったが、デカルトの想像概念を発展的に解釈することで「情報体」という概念が生まれた。詳しくは拙論『情報体の哲学』を参照のこと。

(12) デリダ『他者の言語』法政大学出版局に収録されている「時間を ----- 与える」という講演を参照のこと。

(13) 中沢新一/國分功一郎『哲学の自然』太田出版、p. 70.

(14) Platon, *Symposion*, 206A. (プラトン『饗宴』岩波書店、p. 86.)

(15) Lévinas, *Totalité et infini*, Nijihoff (レヴィナス『全体性と無限』) を参照のこと。

参考文献

加藤典洋『人類が永遠に続くのではないとしたら』新潮社、2014年

國分功一郎『暇と退屈の倫理学』朝日出版社、2011年

曾我千亜紀『情報体の哲学 ---- 二元論再考の視点からみたサイバースペースにおける知の創造』名古屋大学博士学位論文、2012年

中沢新一『愛と経済のロゴス』講談社、2003年

中沢新一/國分功一郎『哲学の自然』太田出版、2013年

見田宗介『定本 見田宗介著作集 I : 現代社会の理論』岩波書店、2011年

米山優『情報学の展開』昭和堂、2011年

Bataille, G. *La part maudite*, Éditions de Minuit, 1949. (バタイユ『呪われた部分』生田耕作訳、二見書房、1973年)

Baudrillard, J. *La société de Consommation*, Éditions Planète, 1970. (ボードリヤール『消費社会の神話と構造』今村仁司/塚原史訳、紀伊國屋書店、1979年)

Derrida, J. (デリダ『他者の言語』高橋允昭訳、法政大学出版局、1989年)

Lévinas, E., *Totalité et infini*, Nijihoff, 1968. (レヴィナス『全体性と無限 (上)』)

(下)』熊野純彦訳、岩波文庫、2005-2006年)

Lévy, P. *L'intelligence collective*, La Découverte, 1994.

Mauss, M. *Essais sur le don : Forme et raison de l'échange dans les sociétés archaïques*, L'année sociologique, seconde série, P.U.F., 1923-1924. (モース『贈与論』吉田禎吾/江川純一訳、ちくま学芸文庫、2009年)

Mauss, M. *Sociologie et anthropologie*, P.U.F., 1968 (モース『社会学と人類学 I』有地亨/伊藤昌司/山口俊夫訳、弘文堂、1973年)

Platon (『プラトン全集 第五巻』「饗宴」鈴木照雄訳、岩波書店、1974年)